

## 日露戦争以前の提灯行列

——日露戦争下の社会の再考に向けて——

岸 本 亜 季

### はじめに

日露戦争下における銃後の民衆については、研究史上、戦争が人々の生活に与えた様々な負担、特に極度の生活苦が強調されてきた<sup>(1)</sup>。一方で、1980年代に入ると、日露戦争中に盛んに行われた提灯行列等の戦勝祝賀が、はじめて正面から取り上げられ、銃後の民衆生活の異なる側面に光が当てられた<sup>(2)</sup>。その後1990年代・2000年代に日露戦争の戦争祝賀の研究は（階層間での）矛盾を含んだ「国民化」の進展と、その現れとしての日比谷焼打ち事件という枠組みを提出してきた<sup>(3)</sup>。

戦争祝賀に浮かれる・熱狂する民衆というモチーフは好まれたのか、1990年代以降各著にたびたび登場するようになる<sup>(4)</sup>。しかし一方で、かつての民衆像との整合性は問題化されず、極度の困窮の中で、あるいは身近な者の死の可能性が常に潜在する状況でなぜ祝勝のお祭り騒ぎに惹かれてゆくのか、その論理・プロセスについてはあまり追求されてこなかった。例えば、日露戦争に際して、戦争祝賀として提灯行列が非常に流行したという認識は持たれていても、その流行の理由や経過そのものは問われずに来た<sup>(5)</sup>。また、日露戦争下での戦争祝賀についての研究は、実証面へはあまり進展せず、どちらかという理論・解釈に重点が特化され、それも（矛盾を含んだ）「国民化」という枠組みがほぼ定式となっている状況である。

民衆と戦争との関係を考えるならば、戦勝祝賀は本来はずすことのできない重要な存在であり、1980年代からの史料状況の変化を踏まえても、今一度日露戦争下における提灯行列などの祝賀を詳細に調査し分析しなおし、そこからさらに、それら祝賀行為・経験の蓄積が何を社会にもたらしたのかを再考察する必要がある。

従来の研究においてなぜ提灯行列が全国的に流行したのかが不問に付されているのは、日露戦争以前の時期において提灯行列がどのようなものであったのかが、明らかとなっていないことが原因の一つと考えられる。日露戦争下において、都市部に限ればほぼ全国的に提灯行列は挙行され、参加団体も住民組織や職業組合等幅広く展開しているのであるが、提灯行列は日露戦争以前においてすでに祝賀行為としておなじみの物であったという暗黙の前提が、その流行現象を自明視させ、詳細な調査へ意識を向かわせなくさせている。この前提への再検討を試みるため、日露

戦争以前の提灯行列について分析することが本論文の目的である。その際、提灯行列及びそれに類するような松明行列、カンテラ行列などの、灯火器を携帯しての行列を提灯行列等行列と総称し、提灯行列と同じく分析の対象とすることとする<sup>(6)</sup>。また、特に断りの無い限り、史料中の下線は本論文筆者による。

## I 提灯行列のはじまりを巡る諸説

提灯行列の始まりについては各所で語られているが、著名なのは石井研堂『明治事物起原』であろう<sup>(7)</sup>。提灯行列は「わが国の人が、始めて米国にて、この歓喜相を見せられ、それがまづ本邦の学校や学生間に行はれ、松明行列にては、火事の危険あるために、万灯行列となり、提灯行列となりて、発達せしものなり」と述べた後、四つの例を史料を交えて示している。(一)は幕府使節が米国で歓待された様を「万延元年『玉虫日録』巻四」、「『柳川日記』万延元年四月二十七日の条」の引用で紹介している。(二)は「開成学校(南校)・『医学校(東校)』が1873(明治6)年「東校の教頭ミルレル」の誕生日に「提灯行列を行」ったというもので「これが、炬火行列の類の嚆矢なるべし」というが、典拠は不明である。(三)は「入沢医学博士の回顧談『中外医事』一一七九号」の引用で、提灯行列の一番始めは「憲法発布のあつた夜、東京大学の学生及職員が揃つて、本統の炬火を持て」「市中を練つて歩き、宮城前の広場迄行つた」ものであるが、「是が西洋でやる〈炬火行列〉であるが、日本の家の建築は、火事の危険が多いのと、提灯と云ふ便利のものがあるので」以後は「〈提灯行列〉の流行となつた」という。(四)は1900(明治33)年の皇太子の結婚に際しての慶応義塾の炬火行列、「帝大および第一高等学生の球灯行列」で、これも典拠は不明である。若干情報が錯綜しているが、国内で行われた最初の例はここでは(二)の1873(明治6)年の開成学校・医学校の例ということになるだろう。

(三)の「入沢医学博士」の説と同様に、永井荷風も憲法発布の時を提灯行列の始まりとしている<sup>(8)</sup>。「明治二十三年の二月に憲法発布の祝賀祭」があつたが、「提灯行列といふもの、始まりは此の祭日からである事を私は知つてゐる」という。「その頃わたしの父親は帝国大学に勤めて居られたが、その日の夕方草鞋ばきで赤い襷を洋服の肩に結び赤い提灯を持つて出て行かれ夜晩く帰つて来られた。父は其の時今夜は大学の書生を大勢引連れ二重橋へ練り出して万歳を三呼した話をされた」「学者や書生が行列して何かするのは西洋にはよくある事だと遠い国の話をされた」という。

一方、柴田宵曲は『明治の話題』で、高田早苗の「半峯昔ばなし」を典拠に1902(明治35)年10月19日の、早稲田大学開校式(創立20周年)が提灯行列の始まりであるとしているが<sup>(9)</sup>、早稲田大学出身者の回顧にも同様の説が見受けられる。慶応義塾のカンテラ行列の向こうを張って、創立20周年の際、高田早苗が考案したという<sup>(10)</sup>。

それでは、ここで向こうを張ったのだとされている慶応義塾のカンテラ行列は、どの様に始

まったのであろうか。

『慶応義塾五十年史』は「第一回の義塾炬火行列」は1894（明治27）年11月26日、旅順占領の報に際し「欧米に行はるゝ「プロセクション」に倣ひて催うされたるものなり」としている<sup>(11)</sup>。一方『慶応義塾七十五年史』においては「炬火行列の始め」として、1894（明治27）年旅順口陥落に際し「提灯行列や旗行列は有りふれてゐて面白くないから何か変つた趣向を凝らさうといふ」ことで、福澤先生の甥の時事新報記者今泉秀太郎氏が、米国のトーチライト・プロセクションに倣ひ、日本独特のカンテラを使ふことを考案した」と記されている<sup>(12)</sup>。

カンテラ行列と提灯行列のどちらが一体先であったのか混乱があるようだが、ひとまず提灯行列・カンテラ行列両方を含めた提灯行列等行列全体の始まりについて今までの説をまとめると、1873（明治6）年開成学校・医学校、1889（明治22）年憲法発布の際の帝国大学、1894（明治27）年日清戦争の戦勝に際しての慶応義塾、1902（明治35）年の早稲田大学の四つがあることになる<sup>(13)</sup>。

いずれにしてもこれら諸説は後世に書かれたものであり、記憶違いや憶測の混入している可能性もある。そこで次に、同時代の新聞や雑誌に現れる提灯行列等行列を見てみたい。

## II 当時の新聞・雑誌から

日露戦争以前について当時の新聞・雑誌を網羅的に調査するのは、時期の広範さも非常に困難であるが、データベースを使用する事である程度の目安を得ることが可能となる。次表は読売新聞 CD-ROM 版の検索、及び聞蔵Ⅱビジュアルの朝日新聞縮刷版の検索を各種検索語で検索して得た結果の内、日露戦争の宣戦詔勅が出された日である1904（明治37）年2月10日付までの記事をピックアップし、二紙をあわせて日付順に並べ替えたものである。以下この項では、この表を軸とし、他の同時代史料なども参照しつつ、時期を区切って当該期の提灯行列等行列について見てゆきたい。

表において国内の提灯行列等行列が最初に登場するのは憲法発布の際である（表中2、3、4。以下括弧内の数字は表中 No. 欄の番号を指す）。2は、「彩光蕉火さいしきたいまつの行列」と称される催しの記事であり、「横濱の富田源太郎、乗田□吉の両氏」が有志を集め「米国等にて行はるゝカラード、トルチエスいろびたいまつ（彩光蕉火）のプロセクション（行列運動）をなす」というものであったが<sup>(14)</sup>、おそらくは同じ催しが、他新聞紙においては「横濱の富田源太郎、乗田彌吉両氏が発起にて」「米国杯にて盛んに行なはるゝ色火炬火いろびたいまつ（カラード、トルチエス）行列運動(ママ)をなす」と報じられている<sup>(15)</sup>。3・4は帝国大学学生の催しについての『読売新聞』記事であり、「トーチ、プロセクション」（3）、或は「祝炬行列」（4）を行うとしている。一方、『毎日新聞』はこれを、「帝国大学職員、教員、学生、生徒諸氏は「夫れより一同打揃ひ泰西諸国に行はるゝ彼の炬火行列（トーチド、プロセクション）を催す由」と報道している<sup>(16)</sup>。

No.	DB	掲載紙面	日時 (予定含む)	場所 (地域)	対象 (機会)
1	読売	1885(明治18)年6月3日朝3面	1885(明治18)年3月31日	〔ベルリン〕	ビスマルクの70歳の誕生日 (4月1日)
2	読売	1889(明治22)年2月6日朝2面	1889(明治22)年2月11日	横浜	憲法発布
3	読売	1889(明治22)年2月7日朝2面	1889(明治22)年2月11日	東京	〔憲法発布〕
4	読売	1889(明治22)年2月9日朝1面	〔1889(明治22)年2月11日〕	〔東京〕	〔憲法発布式〕
5	読売	1889(明治22)年11月6日朝2面	1889(明治22)年11月3日	京都	天長節
6	読売	1892(明治25)年9月27日朝2面	1892(明治25)年9月15日	〔朝鮮〕	朝鮮国王の天長節
7	読売	1895(明治28)年2月10日朝3面	1895(明治28)年2月11日	〔東京〕	威海衛略取〔日清戦争〕
8	開蔵	1895(明治28)年2月10日東京・朝1面	1895(明治28)年2月11日	東京	威海衛略取〔日清戦争〕
9	開蔵	1895(明治28)年2月13日東京・朝1面	1895(明治28)年2月11日	仙台	〔日清戦争〕
10	読売	1895(明治28)年2月14日朝3面	1895(明治28)年2月12日	東京	〔日清戦争〕
11	開蔵	1895(明治28)年2月14日東京・朝3面	1895(明治28)年2月12日	東京	〔日清戦争〕
12	開蔵	1897(明治30)年7月15日東京・朝1面	1897(明治30)年7月14日	横浜	仏国共和祭 (仏国共和政府創立の記念日)
13	開蔵	1900(明治33)年5月8日東京・朝5面	1900(明治33)年5月9日	東京	〔東宮御慶奉祝〕
14	読売	1900(明治33)年5月10日朝2面	1900(明治33)年5月10日	東京	〔御慶奉祝〕〔皇太子の結婚〕
15	読売	1900(明治33)年5月10日朝2面	1900(明治33)年5月10日	東京	〔皇太子の結婚〕
16	開蔵	1900(明治33)年5月14日東京・朝2面	〔1900(明治33)年5月10日〕	〔東京〕	〔皇太子の結婚〕
17	開蔵	1900(明治33)年5月14日東京・朝3面	〔1900(明治33)年5月〕10日	赤坂東宮御所の近傍(東京)	〔皇太子の結婚〕
18	開蔵	1901(明治34)年1月3日東京・朝1面	1901(明治34)年1月1日	札幌	新年・二十世紀歓迎会
19	開蔵	1901(明治34)年5月7日東京・朝5面	1901(明治34)年5月5日	東京	〔御命名式奉祝〕〔皇孫の命名カ〕
20	開蔵	1901(明治34)年5月7日東京・朝5面	1901(明治34)年5月5日	東京	〔御命名式奉祝〕〔皇孫の命名カ〕
21	開蔵	1901(明治34)年5月15日東京・朝1面	1901(明治34)年5月〔14日〕	札幌	札幌農学校創立二十五年記念会
22	開蔵	1901(明治34)年11月11日東京・朝1面	1901(明治34)年11月10日	仙台	〔観兵式、演習カ〕
23	開蔵	1901(明治34)年11月13日東京・朝1面	〔1901(明治34)年11月〕10日	仙台	大演習
24	開蔵	1901(明治34)年11月17日東京・朝2面	1901(明治34)年		
25	開蔵	1902(明治35)年2月14日東京・朝2面	1902(明治35)年2月14日	東京	日英同盟成立
26	開蔵	1902(明治35)年3月7日東京・朝1面	1902(明治35)年3月〔5日〕	仁川	日英同盟の祝賀
27	開蔵	1902(明治35)年3月24日東京・朝3面	1902(明治35)年4月上旬	筑波山	筑波山観測所開所式
	開蔵	1902(明治35)年5月11日東京・朝1面	1902(明治35)年	〔東北〕	皇太子東北行啓
28	開蔵	1902(明治35)年6月18日東京・朝3面	1902(明治35)年6月16日	〔ロンドン〕	
29	開蔵	1902(明治35)年6月21日東京・朝1面	〔1902(明治35)年6月26日〕	横須賀	〔英国王〕戴冠式
30	読売	1902(明治35)年10月14日朝2面	1902(明治35)年10月19日	東京	早稲田大学開校式・創立廿週年記念会
31	読売	1902(明治35)年10月16日朝1面	1902(明治35)年10月19日	東京	早大開校・二十周年記念会
32	読売	1902(明治35)年10月20日朝1面	〔1902(明治35)年10月19日〕	東京	〔早大開校・二十周年記念会〕
33	開蔵	1902(明治35)年10月21日東京・朝3面	1902(明治35)年〔10月19日〕	東京	早稲田大学部開校式
34	読売	1902(明治35)年11月8日朝2面	1902(明治35)年11月15日	大阪	瓦斯問題の市民大会
35	開蔵	1902(明治35)年11月8日東京・朝1面	1902(明治35)年11月15日	大阪	瓦斯問題に対する市民大会
36	開蔵	1902(明治35)年11月9日東京・朝3面	1902(明治35)年11月15日	大阪	〔市民大会〕
37	読売	1902(明治35)年11月10日朝2面	1902(明治35)年11月15日	大阪	瓦斯問題の市民大会
38	開蔵	1902(明治35)年11月10日東京・朝3面	1902(明治35)年11月8日	大阪	瓦斯問題に関する15日の提灯行列の禁止に関する演説会
39	開蔵	1903(明治36)年4月10日東京・朝1面	1903(明治36)年	神戸	観艦式、日本艦隊歓迎の意
40	読売	1903(明治36)年4月11日朝2面	1903(明治36)年4月10日	神戸	〔海軍大観艦式〕
41	開蔵	1903(明治36)年5月31日東京・朝3面	1903(明治36)年6月1日	東京	築地文海小学校創立三十年の記念祝典
42	読売	1903(明治36)年6月2日朝5面	1903(明治36)年6月1日	東京	文海小学校創立三十周年
43	開蔵	1903(明治36)年8月6日東京・朝9面	1903(明治36)年8月10日	大阪	瓦斯問題解決祝賀会
44	読売	1903(明治36)年8月10日朝2面	1903(明治36)年8月10日	大阪	瓦斯問題解決祝賀会
45	開蔵	1904(明治37)年2月8日東京・朝1面	1904(明治37)年2月6日	京都	佐世保方面における活動開始の報に接し祝意を表する

〔表記法について〕

DB (データベース) 欄: 「読売」は読売新聞 CD-ROM、「開蔵」は開蔵Ⅱビジュアル。

掲載紙面欄: 「東京朝日新聞」1904年2月11日朝刊3面は、1904年2月11日東京・朝3面と表記。

検索語欄: 検索語はデータベースとの組み合わせで記号化したうえ、それぞれの検索結果に古い順から番号を振った。たとえば A 10は、読売新聞を省略した。

検索語: ア「提灯行列」、イ「提燈行列」、ウ「堤燈行列」、エ「ちようちん行列」、オ「チヨウチン行列」、カ「ちようちんぎょうれつ」、キ「チヨウチンセ」「かんでら行列」、ソ「かんでらぎょうれつ」、タ「カンテラギョウレツ」、チ「炬火行列」

データベース: (A) 読売新聞 CD-ROM を期間「明治」(1874年11月～1912年7月) につき検索

(B) 開蔵Ⅱビジュアルの朝日新聞縮刷版検索を期間「明治・大正」(1879年～1926年) につき検索

その他: 網掛けされている行は、検索語を記事・見出し等に含まないにもかかわらず検索にかかった記事であり、そのうち提灯行列の類に関する記述

団体・人数	検索語	備考
有志およそ一万人。楽隊、各大学の教員生徒、各教会の旗隊並びに伯林府及び各地の技術学校、鉱山学校、諸芸術学校の派出員、伯林府選挙区の人民農工商諸業の組合総代員及び諸職工等	Aケ1	「松明行列の古式を施行したり」
富田源太郎、乗田□吉が有志数百名を集めて	Aケ2	「米國等にて行はる、カラード、トルチエス（彩光蕉火）のプロセツション（行列運動）をなし」。蕉火には「たいまつ」のルビ。
帝国大学学生	Aケ3	「同學生の諸氏ハ同夜トーチ、プロセスションをなして」
帝国大学「松明行列」	Aク1	表題「大學の祝炬行列」（ルビ「カラード、トルチエス、プロセスション」）
第三高等学校の生徒	Aア1	西洋に倣う、ただし松明を提灯に。「一向見馴ざる事」
	Aア2	「朝鮮固有の楽隊が松火を振舞はし音楽を奏しつゝ、練り行く」。提灯行列の類か不明。
慶応義塾学生及び校員校友数千名	Aク2	「第二回炬火行列」
慶応義塾「学生及び校員校友数千名」	Bチ1	「慶応義塾の第二回炬火行列」
「公私立各学校ハ連合して炬火行列」	Bチ2	「十二日午後十時二十五分仙台特発」
慶應義塾幼稚園、大学生、本塾生、商業部生徒二千余名	Aチ1	「第二回炬火行列」
「慶応義塾」	Bチ3	「慶應義塾の第二回炬火行列」。十一日執行の予定を雨後のため一日延期。
およそ百五十名、「消防夫仏艦乗組員楽隊黒人等」	Bア1	「宵祭提燈の行列あり」、変色の提灯を携える。奏楽とともに仏國軍歌を唱える。
慶応義塾、「職員及び学生一堂炬火行列」	Bチ4	「該炬火行列ハ日清戦役の当時威海衛及び旅順陥落に際して挙行せし者と均しといふ」
大学生二千余名、「球燈行列」	Aケ4	「球燈行列」
慶応義塾、「炬火行列」	Aケ4	「炬火行列」
「大学学生の提灯行列」、「砲兵工廠の職工の提灯行列」	Bア2	石黒男爵の談話として。飯田橋で砲兵工廠の職工の提灯行列に遭遇。
「大学の提灯行列」	Bア3	投書。提灯行列の歌詞掲載。
「札幌農学校生徒」提灯行列	Bア4	「一日札幌特発」
第一高等学校「学生五百八十余名」「所謂提灯行列」	Bア5	「所謂提灯行列の隊伍堂々」と。「奉祝の歌」を唱える。
「陸軍御用達の連中」提灯行列	Bア5	
「提灯行列等あり」	Bア6	「夜ハ提灯行列等ありし」
「仙台市内の各学校」、「松明行列」	Bク1	「十日小牛田特派員発」
「第二高等学校仙台医学専門学校宮城県第一中学校第二中学校及び分校宮城県農学校宮城県師範学校合せて二千五六百人」、「炬火行列」	Bチ5	投書カ。当日、警察官の命により挙行できず
	Bチ6	Bチ5の記事に対する、宮城県警察部からの取り消し依頼。行列は宮内官からの命によるものではなく、有志者の発意にて県立諸学校と第二高等学校及び仙台医学専門学校の催したものの。
「慶応義塾炬火行列」	Bチ7	「新作唱歌」の歌詞掲載
「小学校生徒」の「提灯行列」、「銀行会社各団体の点火行列」、一隊およそ二十人	Bア7	「六日仁川特派員発」。二団体合同か別々かは不明。
「町民ハ毎戸少くとも一人宛及び同高等小学校生徒一同総員六百余名にて炬火行列」	Bチ8	山階宮が観測所を設置。炬火行列にて同宮を山頂の観測所へ導く。
「炬火行列」	Bア8	行啓に際しての「内相の訓示」。提灯行列の類に関する記述なし。
「高等小学校生徒五百名市中有志二千名炬火行列」	Bチ9	「十六日倫敦路透社発」。英国皇帝、皇后とともに炬火行列ご覧。
「早稲田」、「数千の学生校友講師」、「提燈行列」	Bチ10	海軍軍楽隊を奏して先導。
「早稲田」、学生校友講師「提灯行列」	Aア3	
「早稲田」三千名「提灯行列」	Aア4	
「早稲田」三千名「提灯行列」	Aア5	
早稲田の「提灯行列」、四千余名	Bア9	
「提燈行列」	Aア6	「早稲田大学の提燈行列が反響せしもの」。表題「大坂だより」。「(五日□□居士)」情報者の名カ。
市民同盟会発起、全市民あげて「提灯行列」	Bア10	「七日大阪特発」。「最も厳肅に挙行すべく」、「名ある紳士も此行列に加はる」
「提灯行列」	Bア11	「七日大阪特発」。7日各警察署長会議にて、治安警察法により差し止め。
「全市民挙て提灯行列」	Aア7	治安警察法により差し止め。市民激昂。
会衆一同、「自然的提灯行列」	Bア12	「八日大阪特発」。演説会の飾りつけの提燈を持ち帰って市中を回る。
「在神戸居留の外人等」提灯行列	Bア13	「九日神戸特発」。観艦式当夜提灯行列挙行の議あり。
神戸市民有志及び在外居留外国人千余名	Aア8	軍艦警手から海軍軍楽隊が参加。(10日に神戸で観艦式(同一紙面記事)。
築地文海小学校「生徒千二百余名及び同窓会員等」提灯行列	Bア14	京橋區築地一丁目市立文海小学校
文海小学校生徒三千余名「提灯行列」	Aア9	文海小学校、京橋區築地一丁目、公立。
「市民同盟会」会員の提灯行列	Bア15	会員外も行列に参加可能、行列の歌の歌詞掲載
大坂市民同盟会会員（その他も可）「提燈行列」	Aア10	祝賀会にて市民同盟会解散。行列の歌あり。
「京都法政学校東邦語学校生徒数百名」提灯行列	Bア16	「提灯行列の魁」

CD-ROM 検索 (A) において「提灯行列」(ア) を検索した結果得られた記事の10番目に相当。ただし、BイはBアと、BケはBクと同一の結果のた  
ンギョウレット、ク「松明行列」、ケ「たいまつ行列」、コ「タイマツ行列」、サ「たいまつぎょうれつ」、シ「タイマツギョウレット」、ス「カンテラ行列」、

を明らかに全く含んでいない記事、つまりデータベース上のなんらかのミスであろうと思われるものは、No. 欄において番号をつけずに飛ばしている。

一見して分かるように、この当時行列の表記法にはまだ統一性がないようである。一つの行列についてすらどのような語をもって表すかに揺れがある。また、英語をそのままカタカナにして済ませる場合があるのも特徴的である。もしすでに周知の行為であれば、このように表記法に大きくぶれが生じはしないはずであり、これ以前に一度も行われたことがなかったと断定することはできないが、少なくともこの時点においても、灯火器を携え行列するという行動はまだ見慣れない、耳慣れないものであったと推測することができる。

この推測を裏付けるのが、同年の11月に京都において第三高等中学校が天長節の祝賀として「一人毎に笹に紅提灯を吊るしたるを担ぎ」おこなったという表中5の例である<sup>(17)</sup>。同記事では「這ハ西洋にて祝意を表する為め松明に火を点したるを持って隊伍を組み運動するの例に倣ひたる由なれど松明にてハ危険なりとて斯くハ提灯に改め」たものだが、「一向見馴ざる事なれば一際目立て美麗」であったとコメントされている。やはり1889（明治22）年の段階では、提灯行列に類する行為は一般に、非常に新奇な物として受け止められていたと考えてよいであろう。

以上、表中の1から5が明治20年代前半までの記事であるが、その内容は、国内については上述の1889（明治22）年の憲法発布・天長節に際しての合計三件のみとなっている。

明治20年代の後半（6～11）は、国内に関しては慶応義塾の炬火行列（7、8、10、11）、および仙台の「公私立各学校」による炬火行列（9）であり、全て日清戦争を機として行われた例である。

また、表中には現れないがこの頃提灯行列が行われた例として、1894（明治27）年、天皇の銀婚式に際しての第五高等学校の「提燈行列」がある<sup>(18)</sup>。先の第三高等学校の事例では、提灯を使用したことは分るが「提灯行列」という語自体は記事に登場しなかった。それに対しこの第五高等学校の例は、「提燈行列」を自称しており、言葉としての提灯行列もこの頃にはすでに登場していることが分かる。この提灯行列は、行列を準備した学生の一人によって、「非常に骨の折れた問題であつた」と後に回顧されている。「外交軟弱の声が頗る高」い頃で西洋の儀式である銀婚式への批判もあり、「今でこそ提灯行列は何等珍らしきものではないが、当時は頗るハイカラのものにも思はれた」ので、「寧ろ保守的と銘打たれたる其の頃の五高として」「提灯行列により奉祝の誠意を表するといふのは、破天荒の企てであつた」が、「断行に腹をきめ」て準備に当たったという<sup>(19)</sup>。つまり明治20年代後半においても依然として、提灯行列等行列は多くの人にとって全く新しい行為であり続け、場合によっては思い切りのいる催しですらあったのである。

次に、表の12から24が明治30年代の前半となる。明治30年代前半になると、件数も増加し、また「所謂提灯行列」というような表現も登場しており（19）、明治20年代と比べれば提灯行列等行列の認知度は多少上がったことを感じさせる。また、明治20年代においては、憲法発布の際の横浜の例を除き、表中の国内の行列は全て学生・学校によるものであったが、明治30年代前半には「砲兵工廠の職工の提灯行列」（16）なども登場している。しかし依然として圧倒的多数を占

めているのは、慶応義塾（13、15）、札幌農学校（18、21）、第一高等学校（19）、「仙台市内の各学校」（22、23、24）というように学生・学校である。

その点、明治35年以降（25以降）には、1902（明治35）年「筑波山観測所開所式」の例（27）や同年大阪の瓦斯問題の市民大会の例（34～38）のように、学生・学校以外の人々による例がそれまでと比べて若干増加しており、多少の変化が見受けられると言える。しかし学生・学校による行列も依然として多く、割合としてそれらを凌駕するに至ってはいない。

1902（明治35）年の大阪の瓦斯問題の市民大会というのは、大阪瓦斯会社報償問題に際して市民運動の一環として行われた集会のことをさしている<sup>(20)</sup>。この市民大会の開催日に提灯行列を行おうという計画があったのだが（34・35）、警察から治安警察法により不許可の旨を告げられたため行うことができなかった（36・37）。

まだ不許可を告げられる前、『大阪朝日新聞』は「殊に提燈行列の如きは我国には餘り先例のない事で憲法発布の大典当日帝国東京大学の学生が挙行（松明行列）したのが嚆矢かと思ふ其後東宮殿下御慶事の当夜慶應義塾学生が又早稲田大学開校式の当夜其学生が挙行した位のものであり、「我大阪市に在つては戦捷祝賀会の当夜或学校が挙行したのが始めて其後一二挙行されたやうではあるが孰れも一部一局の催しであ」ったと述べ、それとひきかえて今回の提灯行列の盛大さを予測し推奨している<sup>(21)</sup>。

ここでもまた前例が少ないことが強調されているのであり、おそらくこの記事が掲載された1902（明治35）年11月に至っても提灯行列等行列は、祝賀の機会ごとに必ず現れ、頻繁に目にするようなものとなつてはしなかつたのであろう。仮に1889（明治22）年に最初の提灯行列等行列が行われたのだとすると、それから十年以上経過している計算だが、その間容易には普及しなかつたということになる。

### Ⅲ 共通点

以上、提灯行列の始まりに関する諸説（Ⅰ）と、同時代の新聞・雑誌に現れる行列（Ⅱ）とを見てきたが、これまで述べてきた提灯行列等行列におおよそ共通していると思われる点はいくつかある。学生や学校によって担われることが多いことはⅡで見た通りであり、Ⅰもまたいずれの説においても学生・学校が始めたものとしていた。また、新しいものとして受けとめられていることもⅠ・Ⅱ共通の特徴であるが、この点に関しさらに注目すべきことは、西洋、特に米国を由来とする記述が多く見受けられることである（Ⅰ、Ⅱの引用史料中、下線部参照）。「泰西諸国」の「炬火行列（トーチド、プロセツション）」<sup>(22)</sup>、あるいは「米国のトーチライト・プロセツション」<sup>(23)</sup>などに倣って行った、というのである。それでは、西洋における（灯火器を携えた）行列というのはどのようなものであったのだろうか。

西洋における行列について直接調査することは、本論文の趣旨を越える範囲の事柄であるた

め、当該地域についての研究を参照する必要があるが、管見の限り見出せた研究によると、トーチライト・プロセッションというものは、特にフランス革命から第一次世界大戦までの間に行われたものであるという。教授を讃える（70歳の誕生日等）、ある出来事の記憶（大学の創立セレモニー等）、君主への賛辞の三つのグループに分類でき、その全てが火の象徴的表現、公の場での共通の身体的動作、告白と政治的な催しの三つの要素から成っている。学生によって、公衆の前で自らを価値の代表者として提示するために演じられるものであり、政治的立場の視覚化として機能するという<sup>(24)</sup>。

今まで見てきたような日本の初期の提灯行列等行列の形態は、この研究において抽出されている西洋のトーチライト・プロセッションのあり方と重なる要素を多く持つと言える。さらに、前述1894（明治27）年の第五高等学校の提灯行列が、周囲の反対の風潮を押し切り「提灯行列により」「学生らしき奉祝の至誠を表する」のだとの趣旨で校長の了承を得し、困難を排し準備されたという逸話<sup>(25)</sup>などに見るように、最も早い時期の提灯行列は学生が学生という自負心とともに自ら進んで組織する、一種の「学生文化」という側面も有していた可能性を考慮すると、その類似性はさらに高まる。各引用史料において主張されていたとおり、提灯行列は西洋のトーチライト・プロセッションを模倣して始まったと見てよいのではないだろうか。もっとも祭礼の行列等はそれ以前から存在しているが、提灯行列等行列が新奇な行為として繰り返し描写され続けていることから考えて、外来の新たな祝祭行為として受け止められたのであり、基本的には以前からあった祭礼の行列などとは区別されて認識されたと考えられる<sup>(26)</sup>。

#### IV 具体的様相

次に、この頃の提灯行列等行列の具体的な様相を見てみたい。1900（明治33）年5月、皇太子結婚のときに慶應義塾が炬火行列を行ったが（13、15）、それは具体的には、「兵式体操教師藤田少佐」の号令でカンテラに火を点し「進軍の喇叭と共に藤田少佐は騎馬にて」行進を引率し、二重橋前で生徒一同が「歌を一斉に唱へつゝ、広場に円陣を構へ、更に二列一行となりて両陛下の萬歳を三呼」するというものであった<sup>(27)</sup>。騎馬に乗った少佐の引率、「進軍の喇叭」、宮城前広場で円陣から二列一行へのフォーメーションなど、ここでの炬火行列は「兵式体操」のような軍隊風の体育訓練の延長線上に置くことができるものである。このように提灯行列等行列には、学生・学校生徒の日頃の身体訓練の先において実現されるという側面も有されていた。

この行列では行進歌は登場していないが、提灯行列やカンテラ行列などは、多くの場合、歌や音楽を伴って進行するという形をとる。しかしそれは簡単に行うことができたとは限らないようである。

小山 〈前略〉それで僕はさつき話の出た提燈行列の時は行きませんが、赤城神社の坂の上から見ましてね。〈中略〉三木さんがさつき歌を歌つたけれども、あの当時はあんなに歌え



なかつた（笑声）。その当時の学生だから洋楽の事は解らない、所謂音痴なんだ（笑声）<sup>(28)</sup>。

ここで触れられているのは1902（明治35）年早稲田大学開校式の際の提灯行列である。この記述に従えば、1902（明治35）年の段階でもまだ、学生は行進歌をあまりうまく歌えなかったということになる。学生は西洋の音楽に接することができる機会が他の人々と比べた場合に比較的多いと予想されるが、それでもこの当時、西洋風の歌曲に適応できてはいなかったのである<sup>(29)</sup>。

この1902（明治35）年早稲田大学開校記念の提灯行列の様子をさらに詳しく見ると、宮城前でフォーメーションを組むことも騎馬の少佐が指揮をとることもなかったようだが、二隊に分かれて同時に出発、市中で一度合流して一隊になり、その後三隊に分かれて、また合流して一隊になり、桜田門から宮城前へと向かっている<sup>(30)</sup>。合流分裂また合流という複雑な動きは、事前に打ち合わせがなければ不可能である。

またこの提灯行列にあたっては、あらかじめ入念な手順と細かな規則が準備されていた。「開校式及び記念会の終ると同時に、学生は各自弁当係に就きて弁当を受取り、之を受取りたる者は直ちに早稲田大学運動場に赴き、其の入口に於いて提灯を受取り、予定の陣所に就きて弁当を喫し、午後五時半点火の号令を聞くや、各自提灯に点火し、部長、組長の指揮に従ひ」出発する等の「提灯行列に関する手筈」が事前にあらかじめ決められており、また粗暴な振る舞いや混乱がないように、当日学生に「二重橋広場に提灯を棄つべからず」、あるいは「進行中は列を離れて飲食等を為すべからず」、「進行中発病したる者は部長、組長に申出で後列に於ける校医の看護を受くべし」といった心得が数条にわたって告示されている<sup>(31)</sup>。

このように行列の開催に当たっては、事故や参加者の逸脱的行為等のないように周到な用意が行われている。事前に細かい手順を打ち合わせ、情報を参加者に周知させておくことは、学校という常設の組織が存在していることによって容易となる。

逆に取り締まる側からしてみれば、灯火器を手に大量の人間が街中を歩き回るということは、類似の経験の蓄積の少ない状況にあってはそれだけで危険を想起させるものである。日清戦争の際に慶応義塾がカンテラ行列を行おうと警視庁に許可を願い出たところ、「一個のカンテラにても市中を持回るのは危険なりまして数千のカンテラを竹の先きに附して市中を横行することいかなる過ち生ぜんとも測り難しとの事にて不許可」となり、福沢自らが警視庁にカンテラを持参して説得にあたり認可を得たという<sup>(32)</sup>。学生・学校生徒という、構成員があらかじめ決まっており、日常的に団体として存在し、規律・統制のとりやすい集団であることが、許可を得る際に利点となった可能性は少なくないであろう。

まとめると、提灯行列等行列は、西洋風の音楽や、歌に合わせての歩行という新しい文化的要素を伴い、場合によっては軍隊風の身体訓練の成果を発揮して行われるものであった。IIにおいて見たように、1902（明治35）年に至っても前例が乏しく、それは街中で大勢の人間が火を手に練り歩くという現象の蓄積が乏しい状態が長く続いていたということであり、必然的に開催に当

たっては事前の連絡・細心の注意と周到な準備が要求されることとなる。

つまり、学生・学校生徒という特殊な人々によってこそ開催が容易となるものであり、学生・学校生徒以外の多くの人々にとっては、自ら行うものとして身近に感じるには距離があり、また実際に自ら行おうとしてもいくつかの困難な点にぶつかってしまう。そのために基本的には眺めて楽しむものとして、永らく存在し続けたのではないだろうか。

### おわりに

以上見てきたように、提灯行列等行列は西洋のトーチライト・プロセッションの模倣として始まり、まず学生・学校によって推進された。少なくとも1889（明治22）年にまで遡ることができるが、その後十数年間繰り返し前例の乏しさや新奇さが語られ続けるように、中々普及せず、永らく学生・学校が依然として主たる担い手であり続けた。それには、音楽や歌に合わせての歩行、場合によっては規律正しい軍隊風の身体動作などの新しい文化的要素の存在や、あるいは灯火器を用いての集団行為への不安などが作用していた。明治30年代後半になると学生・学校以外の人々も次第に提灯行列等行列に参入し始めてはいるが、それも頻度・割合共に高いということはいえない。

つまり、提灯行列は日露戦争以前にすでに一般化していたとはおおよそ言い難く、また容易に普及するようなものとして存在してもいなかった。日露戦争に際して「猫も杓子も」<sup>(33)</sup>という程の流行が全国的に展開すること、および学生のみならぬ多種多様の団体が祝報と同時に市中に繰り出してくる状況は、自然的とみなすべきではない。流行それ自体を特異な現象として捉え、その仕掛け人と戦略、その戦略になぜ多くの人々が応じたのか、流行がいかなる構造の中で発生しているのかを、プロセスをたどりながら分析する必要がある。そしてその流行現象と、提灯行列等行列の圧倒的な経験の蓄積が何をもたらしたのかは、さらにその先において考察されるべきであろう。それらが次なる課題となる。

### 注

- (1) 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争』刀水書房、2003年5月（『明治の墓標「日清・日露」一埋れた庶民の記録一』秀英出版、1970年6月、改訂増補『明治の墓標一庶民のみた日清・日露戦争一』河出文庫、1990年4月）、大江志乃夫『戦争と民衆の社会史 今度此度国の為め』現代史出版会、1979年7月など。
- (2) 櫻井良樹「日露戦時における民衆運動の一端―「国民の元気」と行動の自由、祝捷行列を題材として―」『日本歴史』第436号、1984年9月。
- (3) 能川泰治「日露戦時期の都市社会―一日比谷焼打事件再考―」『歴史評論』第563号、1997年3月、成田龍一「「国民」の破局的形成 日露戦争と民衆運動」小森陽一・成田龍一編『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、2004年2月。
- (4) 井口和起『日露戦争の時代』吉川弘文館、1998年6月、p.148、149、197、千葉功「日露戦争の「神話」 日露戦争とその後の日本社会」小風秀雅編『日本の時代史23 アジアの帝国国家』吉川弘文館、2004年4月、

p.259～262、片山慶隆『日露戦争と新聞「世界の中の日本」をどう論じたか』講談社、2009年11月、p.106～110など。

- (5) 有山輝雄は日露戦争下の祝捷会・提灯行列がエスカレートし、祝祭的・逸脱的状况を呈した背景には、祝捷会と戦死者の葬儀が交互に繰り返される中で、祝捷気分と追悼の暗鬱な気分との間で引き裂かれるストレス・葛藤があると分析している（有山輝雄「日露戦争とメディア—地域社会の視点から—」東アジア近代史学会『日露戦争と東アジア世界』ゆまに書房、2008年1月）。提灯行列や祝賀会の流行現象の過熱を説明しえる解釈だが、一方で流行現象の着火そのものへの視点は希薄である。
- (6) 読売新聞 CD-ROM 版・聞蔵Ⅱビジュアルの両データベースにおいて、「旗行列」「はた行列」「ハタ行列」「はたぎょうれつ」「ハタギョウレツ」の各語において検索を行った場合、いずれも初出は日露戦争開始の後となり、旗行列は日露戦争以前には発生していない可能性がある。また、各著において提灯行列の由来について語られる際にも、その系譜の中で旗行列に関して触れられることはまずない。さらに後述するように、提灯行列等行列は灯火器を持つために危険性が危惧される場合がある。それらの点を考慮に入れ、旗行列はやや異なる扱いを要するものと考え、本論文では対象としないこととする。
- (7) 石井研堂「提灯行列の始め」『明治事物起原1』ちくま学芸文庫、1997年5月。
- (8) 永井荷風「花火」『荷風全集 第十四巻』岩波書店、1993年11月、p.253、254。
- (9) 柴田宵曲「提灯行列」『明治の話題』ちくま学芸文庫、2006年12月。ただし、高田早苗の『半峯昔ばなし』そのものを見ると、宵曲がふまえていると思われる箇所は「一八九 提燈行列の魁」という項であるが、その項の文面自体からは、それまで提灯行列は皆無であったと主張している訳では必ずしもないように思われる（高田早苗述、薄田定敬編『半峯昔ばなし』早稲田大学出版部、1927年10月、p.388、389）。
- (10) 「法科校友回顧座談会—早稲田大学創立七十周年記念—」早稲田大学法学会『早稲田法学』第28巻（創立70周年記念論集）、1952年12月、p.352。Ⅱで見るように早稲田大学開校式が提灯行列の鎗矢ではないのだが、このような誤解が起こる理由の一つは30周年記念祝典の際に、早稲田が提灯行列の創始者であると盛んに宣伝をしていることがある。「此提灯行列なるものは今日では大分世間でやるが、之れは早稲田大学が始めて行つたものである」（高田学長「始業式訓示（創立三十年祝典に就いて）」『早稲田学報』第224号 1913年10月、p.4）。
- (11) 『慶応義塾五十年史』慶応義塾、1907年4月、p.548、549。
- (12) 『慶応義塾七十五年史』慶應義塾、1932年5月、p.201、202。今泉秀太郎は、福沢諭吉の甥で、慶応義塾本科卒業の翌年明治18年4月渡米、23年に帰国、時事新報社に入りポンチ絵を担当した人物である（手塚豊「今泉秀太郎（ポンチ絵画家）の死刑方法改正論—続・明治法制史料雑纂（七）—」『法学研究』第38巻第11号、慶応義塾大学法学研究会、1965年11月）。「カンテラ行列」というのは、具体的には、石油を入れたブリキの筒を竹の先に付け、点火し持ち歩くというもの（獅子文六「カンテラ行列」『獅子文六全集 第十四巻』朝日新聞社、1969年4月）。
- (13) 他に、早稲田大学開校式説としては、1902（明治35）年早稲田に入学した生方敏郎がいる（生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫、2005年8月、p.127）。また、憲法発布の際の帝国大学学生説としては、『日本家庭百科事彙』が「チョーチン」の項内の「酸漿提灯」の説明中で述べた一文がある。（芳賀矢一・下田次郎編纂『日本家庭百科事彙』富山房、1906年11月 p.902）。さらにこれを、森銑三が『明治東京逸聞史2』において、『日本家庭百科事彙』中の「提燈行列」の項の記述として紹介している（森銑三『明治東京逸聞史2』平凡社、1969年7月、p.237）。
- (14) 『読売新聞』1889（明治22）年2月6日2面（表中2）。□は判読不能な字。
- (15) 『毎日新聞』1889（明治22）年2月6日2面。
- (16) 『毎日新聞』1889（明治22）年2月7日2面。
- (17) 『読売新聞』1889（明治22）年11月6日2面（表中5）。
- (18) 「日は暮れぬ、各々手に球燈を下げて体操場に集まりぬ、蓋し

●提燈行列

- をなすなり」(『龍南会雑誌』25巻、1894年3月、p.50。『龍南会雑誌』は第五高等学校(熊本)の校友会雑誌。明治24年11月創刊。172号から『龍南』と改題)。
- (19) 隅本繁吉「龍南の上古史を辿りて」『龍南』200巻 1926年12月。
- (20) 同問題は、その頃事業に本格的に乗り出そうとしていた大阪瓦斯会社に対して、市長鶴原定吉を筆頭とする大阪市側が報償を要求したことに端を発する。市民大会というのは、1902(明治35)年9月21日に結成された大阪市民同志会によって計画されたもので、最終的には11月15日に中之島公園で開催された(『新修 大阪市史 第6巻』大阪市、1994年12月、p.660～673)。
- (21) 『大阪朝日新聞』1902(明治35)年11月7日3面。
- (22) 注(16)参照。
- (23) 前掲『慶應義塾七十五年史』、p.201、202。注(12)参照。
- (24) Dücker, Burckhard "Fackelzüge als akademische Rituale" LiLi : Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 36(144) Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht Dec.2006 : 105-128。論文末尾のSummary、「Torchlight procession – an academic ritual」参照。
- (25) 総務委員であった著者隈本の所へ他の学生が行列の決行を迫ってきたので「断行に腹をきめ」、校長に承認を得て準備に着手したが、熊本の有力な一新聞はこれを冷笑し、他校学生による行列妨害の噂もあったため「剛の者連中」の学生は「いざと曰ふ場合の手段をも講じて居つたやう」であった(前掲隅本繁吉「龍南の上古史を辿りて」)。また、憲法発布の際の帝国大学の炬火行列は一度は「大学評議会に否決され廃案」となったが「学生諸氏には大に之に反対し是非とも催ふしたし」と主張したという(『毎日新聞』1889(明治22)年2月7日2面)。
- (26) ここから逆に次のような推測を立てることができる。現在、年中行事として行われる提灯行列というものも多く存在するようである。例えば『日本わらべ歌全集8』は、現在は行われなくなったが、かつて浦和市常盤では旧盆8月の13日の夜に提灯行列という催しが行われていたことを、大正15年生まれ的人物からの情報として伝えている(小野寺節子・斉藤紀子『日本わらべ歌全集8 埼玉 神奈川のわらべ歌』柳原書店、1981年2月、p.146、147)。これらの行事が過去にどこまで遡るのか判断することはできないが、これらはおそらくかつては提灯行列と呼ばれておらず、提灯行列が流行し「提灯行列」という語が人口に膾炙した結果その名を冠されるに至ったか、もしくは後代に全く新しく創出されたものではないだろうか(足立区では1953年に提灯行列がお盆の行事として創始されている(佐堀竹子「本木一丁目の提灯行列—お盆の提灯ヨイヤサノサー」『足立史談』第234号、足立区教育委員会、1987年8月))。
- (27) 「義塾の炬火行列」『慶應義塾学報』第28号、1900年6月。
- (28) 早稲田大学法学会前掲書、p.353。小山は小山胖、大正7年卒業。前略・中略は本論文筆者による。
- (29) 生方敏郎によると、日露戦争以前の音楽教育状況は、小学校には軍歌や唱歌があったが、中学には音楽教育はなく音楽の話聞く機会もなかった、通っていた明治学院では慈善音楽会等親しむ機会が他学校よりあったが、一般学生は西洋音楽はほとんど分からなかったという(前掲『明治大正見聞史』p.79、80)。
- (30) 山本利喜雄編『早稲田大学開校東京専門学校創立廿年 記念録』早稲田学会、1903年6月、p.57～64
- (31) 前掲『早稲田大学開校東京専門学校創立廿年 記念録』、p.5、6。
- (32) 福井智賢「我国に於ける炬火行列の来歴」『慶應義塾学報』第88号、1905年3月。また、憲法発布の際の帝国大学の炬火行列も、「右の炬火行列たる危険なるものなれば充分なる取締を要するとて」本郷警察署の非番巡査が沿道に出張、大学附属の消防夫が行列に随従するという(『毎日新聞』1889(明治22)年2月7日2面)。1901年大演習に際して仙台の各学校生徒が行おうとした炬火行列は警察により禁止されるが、その理由は「警察官ハ蓋し炬火の危険を恐れたるならん」と言われた(『東京朝日新聞』1901(明治34)年11月13日1面)。
- (33) 「猫も杓子もといふ諺の通り提燈行列益々流行し」『読売新聞』1904(明治37)年5月13日3面。